セヴラック通信

Courrier de Séverac

第 19 号

2015 後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

24

第 24 回例会
2015年11月22日（日）
衍芸館

プログラム

例会
15：00-17：00

【演奏】

セヴラック：タントゥム・エルゴー（大いなる秘跡）
Déodat de Séverac : Tantum ergo

會田瑞樹 (Marimba)

末吉保雄：Break Through
Yasuo Sueyoshi : Break Through

會田瑞樹 (Marimba)、末吉保雄 (Pf)

セヴラック：夾竹桃の下で～カタルーニャ海岸の謝肉祭の夕べ
Déodat de Séverac : ous les lauriers roses : Soir de carnaval sur la cote catalane

平原あゆみ (Pf)

～休憩～

セヴラック：《セルダーニャ》より
Déodat de Séverac : Cerdaña - 5 Études pittoresques

二輪馬車にて～セルダーニュへの到着
En tartane (L'arrivée en Cerdagne)

祭～ピュイセルダの想い出～
Les fêtes (Souvenir de Puigcerda)

遍歴楽師と落ち穂拾いの女～フォンロムウへの巡礼の想い出
Ménétriers et glaneuses (Souvenir d'un pélerinage a Font-Romeu)

田口　翔 (Pf)

ユッカ・ティエンスー：Egeiro
Jukka Tiensuu : Egeiro

舘野 泉 (Pf)

懇親会
17：00～

19
セヴラック通信
Courrier de Séverac
第19号　2015後期

目　次

〈連載〉セヴラック随想（9）●濱田滋郎 ……5

〈連載〉大田黒公園散策 ④ ●末永理恵子……8

〈連載〉セヴラックと私●大淵靖子 …… 12

日本セヴラック協会第 23 回例会の報告●鎌田和夫 …… 14

第 24 回例会プログラム……3
NEWS……17

〈連載〉セヴラック随想（9）

濱田滋郎

ブランシュ・セルヴァのこと　その1／人と生涯

今回から2回にわたり、セヴラックと最も縁が深かったと言えるピアニスト、ブランシュ・セルヴァのことを書き記してみたいと思う。

ブランシュ・セルヴァは、ピアノ音楽史上稀に見る天才の一人であった。生まれたのは1884年1月29日、処はフランス、コレーズ県のブリーヴ。もちろんフランス国籍だが、父親は東北スペインに住むカタルーニャ人の血を引いていた。ちなみにカタルーニャ人は国境を越えて南フランス（殊にルション地方）にも住んでおり、そこではたとえば、カタルーニャを代表する輪踊りとその音楽「サルダーナ」も日常に行われる。ブランシュ（カタルーニャ風にはブランカと呼ばれた）が、セヴラックの人と音楽にあれほど深く共感したことの源には、「自分はミディ（南フランス）の人間である」という、彼女の強い自覚があったのだと思われる。

ブランシュは5歳の頃からピアノに触れたが、驚くべきことに、最初の手ほどき以外はすべて独学であったという。9歳でパリ音楽院に入学するが、わずか2年で中退してしまう。「音楽について、芸術について、教わることがもうありませんでした」と、後年、彼女は述懐している。13歳のとき公開演奏を行い、1899年、ヴァンサン・ダンディと出会った彼女は、スコラ・カントルムで彼から作曲を学び始める。ピアノに関しては、もう、学校で教わるべきことは何もなかった。その証拠に、1902年、わずか18歳の彼女を、ダンディはスコラ・カントルムの教師として採用したのだから。ダンディがピアニスト、ブランシュの実力をいかに信頼していたかは、彼が《ピアノ・ソナタ》（1908）および《主題と変奏、フーガと歌》（1926）を彼女に献呈していることからもわかる。その頃すでに、最高度の読譜力と暗記力を身につけていた彼女は、ラモー、クープランから古典、ロマン派を経て当時の“現代音楽”に至る、おびただしいレパートリーをわがものにしていた。その上で、1904年、まだ20歳の彼女は、パリで、17回にわたる「J.S.バッハ：全クラヴィーア曲連続演奏会」を催したのである。程なく「ベートーヴェン：全ピアノ・ソナタ演奏会」もそれに続いた。当時のフ

ブランシュ・セルヴァ
Blanche Selva（1884-1942）

ランスにおいて、これらが全く珍しい“事件”であったことは言うまでもない。しかも彼女は、20代前半において、最も敬愛したセザール・フランクから、シャブリエ、ダンディ、デュカス、ルーセル、ドビュッシー、ラヴェルなど、近・現代（当時の）のフランス音楽をさかんに演奏して斯界に貢献した。その中でも、気質・感性の類似から最も力を入れたのが、セヴラックの楽曲だったわけである。さらにブランシュは、アルベニスを始めとする隣国スペインの作曲家たち、あるいは彼女がとくに興味と好意を抱いたチェコの作曲家たち（スメタナ、ノヴァーク、スーク……）の作品も得意にし、それらをフランスに紹介した。チェコにはしばしばピアノの教授として出かけている。フランスに住んでおり、セヴラックと同様スコラ・カントルムとの縁もあったアルベニスとのつながりも重要である。アルベニスが、早すぎた晩年の1905年以降、畢生の大作として打ち込んだ組曲《イベリア》の創作にあたっては、ブランシュはつねに傍らに在って、有効な助言を与えつづけた。アルベニスが理想を追うあまり、難しすぎて弾けない譜面を書いてしまうたび、ブランシュは率直に意見を述べて改筆させた。なにせ、彼女は作曲家から初演をも任されていたので、責任の一端を担わねばならなかったのだ。

セヴラックに対しても、ブランシュの助言がしばしば有益に働いたことはよく知られている。最も良い例は、組曲《セルダーニャ》の第4曲〈リヴィアのキリスト十字架像を前にしたラバ引きたち〉。あの名作は、《セルダーニャ》第3曲と終曲とのあいだに、何かもうひとつゆったりとした抒情的な曲が入ったら、全体がさらに映えるのに……というブランシュの感想、忠告から生まれたのである。

第一次世界大戦（1914-18）の間そして戦後の数年間、ブランシュは少しずつスコラ・カントルムとの間に距離を置くようになり、時には郷里のブリーヴに帰って、ピアノ教育関係の著作に打ち込んだりもする。前記のようにチェコへ出向いて生徒を教えたのも1920年頃である。いっぽう1923年から、彼女は気のあったカタルーニャ人のヴァイオリニスト、ジョアン・マシア（Joan Massiá）と組んでのデュオ活動を行うようにもなる。

彼女が貴重な評伝『デオダ・ド・セヴラック』の執筆を思い立ったのは1927年頃、すなわち彼が世を去って6年後のことであった。作曲家に関する最初のまとまった、本格的な評伝として、1930年にパリのドラグラーヴ（Delagrave）社から出版を見たこの本――付録込みで119頁、けっして大冊とは言えぬながら――の値打ちは量り知れない。同じ時代を生きた者にしか書けない筆致をもって、愛着を込めて書かれたこの本の価値は、幾冊かすぐれたセヴラック関係の著書が現れている今日も、けっして薄められるものではない。

ブランシュはその後、アルベニスの評伝も書いて世に残そうとしたらしいが、残念ながらこれは果たせなかった。1927年、ブランシュはバルセロナ（カタルーニャ地方首都、スペイン第2の都会で音楽には特に伝統を持つ）で、「ベートーヴェン没後100年」のイヴェントを企画、実践している。その後、彼女はこの市に本拠を求めて、主として教育活動に尽くすことになる。というのは、1930年11月のある演奏会の途中、彼女は突然、腕の麻痺に襲われ、以後、公開でピアノを弾くことが不可能になったのである。従って、以

ルネ・デ・カステラ撮影の肖像、1911 年

降の生活はもっぱら教えることと、作曲とに向けられた。1936 年、スペイン内戦が勃発、バルセロナにも砲弾が飛び交うようになると、ブランシュはこの地を離れ、フランスへ戻らざるを得なくなった。彼女は以後、中部フランスのクレルモン＝フェラン地区に暮らし、1942 年 12 月 3 日、58 歳の若さで、寂しく亡くなった。

ピアニストとしての盛期に彼女がパリほかで行った演奏会の総数は、1,400 回にも及んだという。それに著作活動もまじえた疲労の蓄積が、彼女から健康を奪い、生命を縮めたのに違いない。残された写真を見ると、ブランシュはけっして繊細な虚弱体質とは思われず、むしろ肥満体というばかりに、どっしりと豊かな体格をしている。いわゆる美人ではないが、堂々とした風格を感じさせる顔かたちである。彼女に接する男性たちは、おそらく、異性として見るより先に、素晴らしい人間、ごく偉大な芸術家として彼女を見たのではなかろうか。12 歳年上にあたるセヴラックに、ブランシュは異性としての憧憬も抱いていたに違いない、と見る人もある。たとえそれが真実であったにせよ、彼女がその想いを表面に出した形跡はない。ともかくも、彼女は彼の作品を演奏し続け、彼の評伝を書き上げることで想いを遂げた。そして彼女が後年バルセロナに住み、同地の音楽界に尽くしたのも、セヴラックが夢みていた「南フランス、東スペインの地中海沿岸地帯を包含する音楽文化の昂揚」を、自分が後を継いで成し遂げようとする心ゆえではなかったろうか？

［次回には、ブランシュ・セルヴァが残したレコーディング、および作曲家としての彼女の作品について記す予定です］

［連載］

大田黒公園散策 ④

フォーレ《レクイエム》日本初演

末永理恵子／文

前回まで3回にわたって、1910年から1920年頃までの大田黒元雄の周辺を見てきたが、今回は少し趣向を変えて、ガブリエル・フォーレの有名な《レクイエム》op.48の日本初演についてご紹介する。時代がかなり新しい方へとんでしまうが、来年の3月でその日本初演から80年を迎えるので、少しスポットライトを当てたいという趣旨である。

それは、1936（昭和11）年3月6日、金曜日の夜7時から日比谷公会堂において、児童擁護協会主催で行われた「大合唱の夕べ　虐められる子のために」という催しであった。プログラムの表紙には「GABRIEL FAURÉ REQUIEM　日本初全演奏」と謳われている。前半に「ジルヘル」（F. ジルヒャー）作曲「ローレライ」、メンデルスゾーン作曲「おお雲雀」と「鶯」、「ツェルネル」（C.F. ツェルナー）作曲「踊り」（いずれも合唱）があり、次に児童擁護協会会長の穂積重遠男爵の挨拶をはさんで児童虐待防止映画「明朗日本」を上映し、そのあとにガブリエル・フォーレ作曲「鎮魂彌撒曲」が演奏されている。合唱団はホワイト合唱団、東京オラトリオ協会、ルナ・オリオンコール、ヴォーカル・フォーアと4団体が出演し、「合唱員二〇〇名」であった。オーケストラ版ではなく、津川主一（オルガン）、ジェームス・ダン（ピアノ）の名があり、さらに独唱として平井美奈子（ソプラノ）、太田黒養二（テノール）、内田榮一（バリトン）、と3人の名前が見えて、通常の編成とは異なっていたことがわかる。指揮は「くつが鳴る」「叱られて」「春よこい」その他、童謡作品でよく知られる弘田龍太郎であった。弘田が保存していたプログラムをお目にかける。

この演奏会には若き柴田南雄が参加しており、思い出を綴っているので、引用しよう（「フォーレの『レクィエム』（コルボス）」、『レコードつれづれぐさ』音楽之友社、1976、p.329～334より。初出『ステレオ』1973年11月号「私の音楽ノート11」）。

フォーレ《レクイエム》日本初演プログラム
明治学院大学図書館付属日本近代音楽館蔵

もはや遠い日のことだが、わたくしがフォーレの歌曲に深く魅せられていた頃、思いがけなくもこの「レクィエム」が本邦初演され、わたくしは本番までの何回かのリハーサルに押しかけていき、この曲の響きに浸れるだけ浸ったことがあった。
（中略）練習所は神田の YMCA、その練習期間のさなかに二・二六事件が起こったから、時は一九三六年（昭和十一年）の早春である。指揮者は何と童謡作曲家で知られる弘田龍太郎で、独唱者は平井美奈子、太田黒養二、内田栄一の三氏。じつはこの曲にテノールのソロはないが、合唱の中に多く出るソプラノやテノールのパート・ソロの部分をその演奏では太田黒氏に委ねたのだった。オーケストラの代わりにオルガンの津川主一、ピアノのジェームス・ダンの二氏がその部分を受け持った。そのアレンジはおそらく弘田氏の手によったものであろう。ともかくわたくしは譜めくりなど手つだいながら、当時としては滅多にきけないフォーレに酔い、リハーサルの合間などにこの音楽について熱っぽく語り合っていた津川氏が手ぶりをまじえ、身体を極力くねらせて「こういうふうに、縁故から縁故を求めて、転調していくのネ」と一同を笑わせたジェスチュアは今も目先にちらつく。

時は二・二六事件で騒然としていた最中で、児童擁護協会会長の穂積法学博士が練習場を訪れて「皆さんはこの歴史的な非常時の、外出もままならぬ夜にこうして多数お集まりになり、熱心に練習をされて感謝にたえません。しかし今回皆さんがお選びになった曲は、奇しくも今回の事件で命を失った人たちへのこの上ないはなむけとなりました……」と挨拶したという。「わたくしはこの挨拶をきいて、フォーレの「レクィエム」がどういう曲であるかを民法の大権威がちゃんと知っておられることにちょっと驚き、同時に日本軍隊の一部の反乱と要人数人の虐殺という未曽有の大事件のさなかに、ひたすらフォーレの音楽美に没入している自分のあまりの呑気さに痛棒を加えられた思いがしたものである。時にわたくし自身は高校三年をまさに終え、大学入学もきまっていてノンビリ・ムードのさなかにあったのだから無理もないのであるが」と柴田は述懐する。「ファシズムに急傾斜しつつあった日本軍閥の蛮行とフォーレの「レクィエム」くらいおよそ対照的な取り合わせはない。しかしそれが偶然に、人にも知られず、ささやかな鎮魂と浄化の役を果たしたことにわたくしは一種の感動――それは穂積先生の挨拶のおかげで喚起されたのだが――を覚え、そのことをながく忘れることができなかった」。

穂積重遠は、平塚らいてうら女性運動家を支援したり、1933 年 4 月の児童虐待防止法制定に力を尽くすなど、弱者を扶けることに心を砕いた民法学者である。児童擁護協会は、虐待を受けている児童の調査や保護活動とともに講演会などの啓発事業を行うことを目的として、1933 年 5 月に発足した民間保護団体で、神田の須田町に保護所が設けられていたという。演奏会プログラムに掲載されたフォーレについての説明文の最後に、「フォーレは、子供を非常に愛した。そのフォーレの「レクイム [ママ]」が、児童擁護協会の手によって日本で初全演奏されることは、誠に意義あることと云はねばならぬ」と書かれている。会長の穂積は、法学者として、またそれ以外の社会的業績の一方で文化

人としても知られ、渋沢栄一の長女である母譲りの演劇好きであった。1912年から16年と、ちょうど大田黒元雄の留学時期と重なる頃に独仏英米への留学経験があり、西洋の演劇も愛好した。留学中の日記に基づく『独英観劇日記』（1942）が出版されたほどで、この観劇記の中にはオペラも含まれ（「タンホイザー」「ローエングリン」「マイスタージンガー」「ラインの黄金」「蝶々夫人」「カルメン」「ミニオン」「ファウスト」）、あらすじの紹介と感想が記されている。ベルリンの歌劇場での鑑賞記が最も多いが、ロンドンで活躍中の三浦環の公演にも足を運んでいる。

閑話休題、「レクイエム」日本初演の頃の音楽雑誌を見てみよう。初演直前の2月にはビクターからフォーレのレコードがまとめて発売されて、『月刊楽譜』で華々しくフォーレの特集記事が組まれ、『音楽新潮』でも柿沼太郎による「レクイエム」解説のほか、フォーレに関する2つの記事が掲載される。『月刊楽譜』1936年2月号「フォーレ特輯」には津川主一による「フォーレの鎮魂彌撒曲」解説が含まれ、演奏会が予告されている（「三月八日には日比谷で各民間の合唱團合同で小生等が關係して、この曲の初演がある。かくして、フォーレのレクィエムも徐々に日本の樂界に緣の深いものとなつて行くであらう」とあり、当初は8日に演奏する予定だったらしい）。

この話題のビクター2月新譜の「フォーレ特輯」の広告は以下のようなもので、中の1つ（5枚組）が「鎮魂彌撒曲」である。

「レクイエム」は1930年録音で、ブレ Gustave Bret 指揮、パリのバッハ協会 Société J.S.Bach の演奏でオルガンはセリエ Alexandre Cellier。世界初録音である。前述の柴田南雄のコレクションにもこの盤が含まれていることを付け加えておく。

特殊な目的の演奏会だったためか、足を運んだ人の批評や感想のようなものをまだ見つけることができていないが、演奏会後に発行された号（4月号）にはグラビア写真も載っていて、舞台の様子を窺い知ることができる。

オーケストラ版による演奏は、現在把握している限りでは1950年までは実現していないと見られるが、日本初演時の周辺状況について少し想像をめぐらせるきっかけになれば幸いである。

（末永理恵子）

『月刊楽譜』1936年2月号裏表紙

フォーレ《レクイエム》日本初演舞台写真（『月刊楽譜』1936 年 4 月号より）

練習所だった東京 YMCA 会館跡地の記念碑

リレー連載

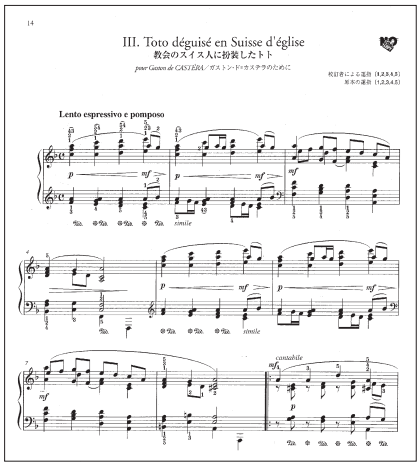
セヴラックと私

大淵靖子

　私がセヴラックと出会ったのはある年の夏、実家に帰省中のことだった。
暇を持て余した私は人けのない街をブラブラ歩き、古いピアノ商の店へと入った。華やかに並んでいるピアノを横目に奥へ進むと、小じんまりとした棚にひっそり楽譜が並んでいた。その棚に左から右へ、目を落として行くと『セヴラック　ピアノ作品集』に目が止まった。
「セヴラック」、農作業もしながら作曲をしていたと言う話を、聞きかじったことがあった。ちょうど夏休みの私は《休暇の日々から》を買い、ブラブラ歩きを終えた。
　弾いてみると、遊び廻る子供達の姿や農道を自転車で走ると煌めく木々の葉、草いきれと畑の混じり合った匂い、そんなことを感じた。それに、セヴラックは雑草達のことを雑草とは言わず「えのころ草」だとか「ノミノツヅリ」と名前で呼ぶような気がしてならなかった。

　熱中して弾いたのは〈スイス人に扮装したトト〉。この曲を弾いていると「ごっこ遊び」で変身した子供が、生き生きとそこに見えるようだった。そして何度か弾くうち、最初の主題にはトトの変装とともに、和音の残響が鐘の響きでもあることに気がついた。和音から降りてきて締めの音にもなっているＦやＡはこの低音の響きが気持ちよく、ガーンと鐘のごとく響かせたくなるのだ。
　ところが後に、舘野先生とチッコリーニ氏の CD を購入し聞いてみると、Ｆ や Ａ の鐘の音は私が思っていたのとはまったく違った。その鐘は、どこか遠く優しく鳴っているようだった。
　これは一体、どんな鐘の音をセヴラックは求めているのだろう？　拙いピアノしか弾けない私には、それがどんな音で弾く鐘なのか解らなかった。

　暫し CD でこの鐘の音を聞くうち、一つ思い出したことがある。
その昔、私は馬術を勉強しにノルマンディーの小さな村の乗馬クラブに住んでいた。村には大きな女子修道院と小さな無人の教会があり、ここに住みだしてからは修道院の鐘の音が時計代わりとなっていた。
　３～４か月も過ぎた頃、インストラクターにお客さんを連れて森のプロムナードへ行くよう、言いつけられることが多くなってきた。



ある日、合宿に来ていた女の子と二人で近くの森へ行った時のことだ。毎日森へ行っている慣れもあり、今日は二人なのだからと私はいつもの道ではない道を、行ってみたくなったのだ。すると戻る道に出るはずが、どう行っても行き止まりや、見慣れない道ばかりへ出てしまう。仕舞いには乗馬クラブがある方角すら解らなくなった。

完全に迷ってしまったのだ。

もう１人の女の子はさぞかし不安だったことだろう。私はその動揺を隠し、女の子の前で必死に大丈夫だと繕った。きっと馬には、私の心臓の鼓動が伝わっていたに違いない…。

日もどんどん暮れはじめ、洒落にならなくなってきた頃だった。遠く斜め後ろから「カーンカーン」と鐘の音が聞こえてきたのだ。修道院の鐘だ！　その音にすがりつくように私は、ひたすら鐘の鳴った方へ馬を向けた。どうやら、まったく反対の森の向こう側へ出ようとしていたらしい。

それから、無事に乗馬クラブへの帰路に着いた。

鐘には時刻を知らせるだけではなく、自分の居場所を教えてくれる役割があったことを、この時教えられた。

トトの鐘の音を聞くと、なぜかこの時の鐘を思い出してしまうのだ。遠いけど確かになっている鐘。

セヴラックさん、この鐘の音は遠くで鳴っているのですか？　それともトトの心の中で鳴っているのでしょうか？

この続きはセヴラックの故郷、サン＝フェリックス・ロラゲで鐘の音を聞きながら、答えを探してみようと思っている。

日本セヴラック協会第23回例会の報告

鎌田和夫

23回目の例会は6月13日に開かれました。この日は曇。気温29度で蒸ていましたが、松本智勇さんによる『サルヴェ・レジーナの千年』と題した講演からはじまり、いっぺんに場内は敬虔な雰囲気に包まれ、蒸し暑さを忘れてしまいました。マリア様の千年の歴史を一時間で収めるというギュっと詰まった講義であります。ギリシアから生まれたとされるサルヴェ・レジーナがドイツで発達し、フランスに来たのはスペインからだというのです。

「めでたし元后　あわれみの母　われらのいのち　喜び　希望。旅路から　あなたに叫ぶエバの子　なげきながら　泣きながらも　涙の谷に　あなたを慕う。われらのためにとりなすかた　あわれみの目を　われらに注ぎ　とうとい　あなたの子イエズス・キリストを　旅路の果てに示してください。おお　いつくしみ　恵みあふれる　喜びのおとめマリア！」。

この歌が、千年の歴史を経て、今また将来においても、いろいろな作曲家によって作られただろうと平和を案じながら松本さんは順を追って写真、録音されたサルヴェ・レジーナをきかせてくれたのです。ドイツの作曲家コントラクトゥスやフランスのデュファイ、オブレット、デプレ、隠れキリシタンの祈りなど珍しい音が続き、スカルラッティやペルゴレージ、ハイドン、ホフマン、シューベルト、メンデルスゾーン、リスト、プッチーニ、ベルリーニ、フォーレなど、とりあげればきりがない作曲家たちのよるサルヴェ・レジーナが作られていることを知ることが出来ました。セヴラックも1916年にヴァイオリンとピアノによるサルヴェ・レジーナを作っていました。セヴラックの友人である画家ルドンはヴァイオリンを得意としたことから、セヴラックはルドンと共演し、リサイタルを開いたのではないか、と松本さんは推測するのです。素敵な話でありました。

休憩の後は演奏会となり、まず末吉保雄先生の解説から。「山田実紀子さんのヴァイオリンと深尾由美子さんのピアノで行われるセヴラック《リート・ロマンティック》は日仏会館で演奏したものです。はじめに演奏してもらうのは深尾さんの先生であり、セヴラック研究家として著名なピエール・ギヨー先生の編曲による譜面。続いて日仏会館で演奏してもらったルネ・ガスペラの編曲によるものです」。

ギヨー先生の曲は明るさの中に哀しみの消えようとしない空気が漂い流れ、それが永遠と続く。ガスペラの曲は、哀しみの中に明るさの漂い流れ、どこまでも明るく沁みてゆくのでした。続くセヴラック《ポンパドール夫人のスタンス》を深尾さんのピアノで。優しさに満ちあふれたポンパドール夫人が珍しく戸惑った様子で、思案顔。しかし、直ぐに落ち着きを取り戻し、なんでもないと明るく、そつのない振る舞いをみせながら、周囲への心配りをしている姿の美しく。そんな情景が浮かんで来ました。

次に森朱美さんのソプラノと末吉先生のピアノで、セヴラック《ヴォカリーズ・エチュード》を。リズミカルなピアノの旋律の勢いに負けず、アワワァワァ、アアアアアーと歌う森さんの歌声の涼やかな、のびやかな音色にひととき酔っていました。

続いて、鎌田直純さんのバリトンと末吉先生のピアノでセヴラック《空は、屋根の上で…》と《王は太鼓を叩かせた》。屋根の向こうの空は真っ青なのに我が心は暗く、静かに澄んだ空に鐘が鳴っているのに我が心は限りなく暗い。そんな情景を表現するのにバリトンの声がピッタリ響いて来ました。《王は…》は兵士の妻に惚れてしまった王に、兵士はあくまで忠誠を尽くさねばならない理不尽。今でも通じそうな哀しい歌であります。苦しげな歌なのに、どこか楽しげに響いてくる声とピアノ。人間の哀歓が身に沁みてきます。これもバリトンに相応しい曲でした。

ラストは舘野泉先生の登場。「今年のセヴラック音楽祭（7月）では何も弾かないとクバイネに言ってましたが、結局弾くことになりました。というのも、2月にチッコリーニが 89 歳で亡くなり、彼もセヴラックのピアノ曲を全曲録音していて、彼の遺言にセヴラックの墓の傍に埋葬してくれないかとあったというのです。私も全曲録音しているので、バッハやスクリャービンと光永光一郎《サムライ》を演奏することになりました」と舘野先生。アンコールはシサスク《エイベレのオーロラ》を。それらを詩にいたしましたので、その時の舘野先生のピアノの調べを思い出していただければ幸いです。

「サムライ」

鎌田和夫

風の流れに
一挙手
一投足が
読みとれる
おかしなほどに
見えるのだ
うごく相手の
心まで
手に取るように
わかるのだ

とぼとぼと
歩みゆく道
一本の
まっすぐな道
ひとり生き
邪魔者をたち
さばかねば
ならぬだろうと
殺気立つ
ゆれる心よ

いま向こうから
やってくる
馬上の武士に
手合せを
もうし込まねば
気がすまぬ
どこの者とも
わからずに
知らぬが仏
いきり立つ

正しき道を
歩まずに
道草しつつ
歩みゆく

わなわなと
ふるえるカラダ
とり乱し
もだえ苦しむ
わがすがた
けわしき顔の
すきだらけ
とっさの閃光
カタナキズ
傷みのはしり
ケガのなく

息をしなら
刈り取られ
苦しみもがき
見透かされ
動きもとれず
見つめられ
心の底を
えぐられて
どうにもならず
困り果て

切られゆく
倒れたカラダ
赤い血に
染まることもなく
みねうちの
わき腹いたく
押さえつつ
参りましたと
あやまりて
命乞いする

正しき道を
歩まずに
より道しつつ
歩みゆく

惨めなおもい
はじめから
することもなく
歩みゆけ
なにが正義か
たそがれの
尊き道を
真っ直ぐに
心のなかの
道をゆけ

冷血に
刀で人を
あやめれば
呪って出るは
ヒツジョウと
覚えておくが
よかろうと
いのち粗末に
あつかうな
そうたしなめん

馬上の人は
おだやかに
血走ることも
ないままに
地べたに咲いた
白い花
そっとわが手に
渡しつつ
妄想だよと
笑ってた

正しき道を
歩まずに
道草より道
歩みゆく

「エイベレのオーロラ」

鎌田和夫

かがやきの
夜空の星よ
極光の星
呼びさます神秘
遊ぶ暗闇
ゴロゴロゴロと
天の底から
尽きることなく
限りなき音
ひかりカガヤク

ひかりキラメキ
キラメキはなち
ながれキラメキ
キラメキはなれ
キラキラキラと
キラメクはなび
ひかりヒカレよ
天の底まで
星のカガヤク

黄緑色から
赤色に
変化しながら
青白く
淡くないゆく
あかつきの
女神のエガオ
オーロラの
つややかな舞い
薄絹の
悩ましき影
もだえつつ
揺れている

ナガレナガレて
シャワシャワと
大波小波
おしよせ壊れ
火花ちり
アチラコチラに
放出し
暗黒のなか
消えゆくよ

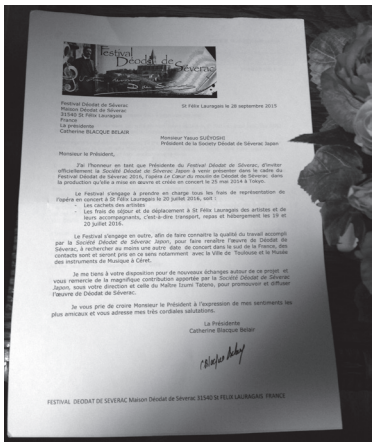
クネクネと
たわむれ踊る
妖精の
素顔あやしく
すがたみに
反射するカゲ
透明に
静かにことを
おかしつつ
オノレを知らず
泡となり
極限のいろ
どこまでも
フアフア天へ
召されゆく

まぶしき光り
なりやまぬ
歌姫の声
とどまらず
なつかし心
あわき空
消えゆく星の
運命に
いのちの限り
エンエンと
泣けよヒカリよ

震えつつ
どこへ流れて
かがやきの
あざやかな色
とうめいに
波うつ闇に
照らされて
かがやく光り
キラメキの
キラリキラキラ
エイベレの
オーロラ消えゆ

NEWS

日本セヴラック協会フランス・ツアー 2016 のお知らせ



Festival Déodat de Séverac
Maison Déodat de Séverac
31540 St Félix Lauragais
France
La présidente
Catherine BLACQUE BELAIR

St Félix Lauragais le 28 septembre 2015

Monsieur Yasuo SUEYOSHI
Président de la Society Déodat de Séverac Japan

Monsieur le Président,

J'ai l'honneur en tant que Présidente du *Festival Déodat de Séverac*, d'inviter officiellement la *Société Déodat de Séverac Japan* à venir présenter dans le cadre du Festival Déodat de Séverac 2016, l'opéra *Le Cœur du moulin* de Déodat de Séverac dans la production qu'elle a mise en œuvre et créée en concert le 25 mai 2014 à Tokyo.

Le Festival s'engage à prendre en charge tous les frais de représentation de l'opéra en concert à St Félix Lauragais le 20 juillet 2016, soit :

- Les cachets des artistes
- Les frais de séjour et de déplacement à St Félix Lauragais des artistes et de leurs accompagnants, c'est-à-dire transport, repas et hébergement les 19 et 20 juillet 2016.

Le Festival s'engage en outre, afin de faire connaître la qualité du travail accompli par la *Société Déodat de Séverac Japon*, pour faire renaître l'œuvre de Déodat de Séverac, à rechercher au moins une autre date de concert dans le sud de la France, des contacts sont et seront pris en ce sens notamment avec la Ville de Toulouse et le Musée des instruments de Musique à Céret.

Je me tiens à votre disposition pour de nouveaux échanges autour de ce projet et vous remercie de la magnifique contribution apportée par la Société Déodat de Séverac Japon, sous votre direction et celle du Maître Izumi Tateno, pour promouvoir et diffuser l'œuvre de Déodat de Séverac.

Je vous prie de croire Monsieur le Président à l'expression de mes sentiments les plus amicaux et vous adresse mes très cordiales salutations.

La Présidente
Catherine Blacque Belair

FESTIVAL DEODAT DE SEVERAC Maison Déodat de Séverac 31540 St FELIX LAURAGAIS FRANCE

フランスのセヴラック協会から送られてきた招聘状

日本セヴラック協会事務局では、2016 年の 7 月中旬から下旬にかけて、フランス・ツアーを行うべく、現在、準備を進めています。

今回のツアーの中心となるのは２つ（または３つ）のコンサートです。

まず、7 月 20 日に、セヴラックの生地サン=フェリックス・ロラゲ村でで毎年開催される「セヴラック音楽祭」に出演、セヴラック作曲のオペラ《風車の心》を上演します。演出や編成は、2013 年 5 月に日本初演したバージョンで、ピアノやフルート、打楽器による伴奏。キャストも日本初演時の出演者を中心に構成する予定です。

また 7 月 24 日には、パリにある日本館で、ジャン=ジャック・クバイネ、舘野泉、末吉保雄、鎌田直純、平原あゆみ他の各氏によるコンサートを企画しています。こちらはセヴラックやフランス人作曲家の歌曲やピアノ曲と共に、末吉保雄氏を始めとする日本人作曲家の作品の演奏する予定です。

さらにセヴラックが晩年を過ごした地セレでのコンサートも検討中で、現在フランスのセヴラック協会に打診しています（日程未定）。

ツアーの全体の日程は 7 月 16 日頃から 7 月 26 日頃までに及びますが、会員のみなさまには、いくつかの短期型・中期型・標準型・現地集合型など、いくつかの参加パターンを用意する方向で話を進めております。今後、詳細が決まり次第、手紙やメール、日本セヴラック協会 FaceBook などで、お知らせして参ります。楽しみにお待ちください。

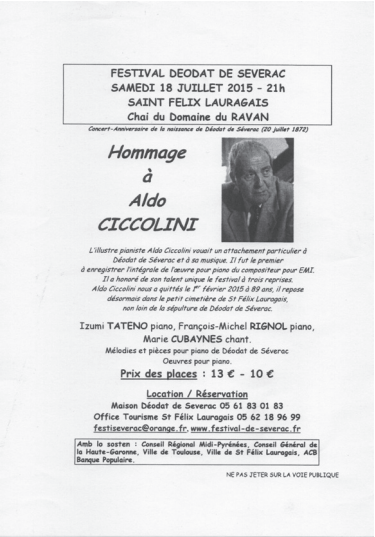
NEWS

「チッコリーニ氏を讃えて」演奏会に舘野泉氏が出演

今年の２月１日にピアニスト、アルド・チッコリーニ氏が亡くなりました。サティやドビュッシーを始めとする膨大なレパートリーを誇った名ピアニストでしたが、セヴラックへの愛情も深く、彼のピアノ作品の大半を収録した２枚のアルバム（日本盤の解説は濱田滋郎氏！）残しています。

2012 年 12 月 1 日、すみだトリフォニーホールにおける来日公演では《休暇の日々》や《ラングドック》など自由に選曲し、親しみのこもった演奏を披露しました。

チッコリーニ氏は遺言によってセヴラックの墓の近くに埋葬されました。埋葬と合わせて、7 月 18 日にサン＝フェリックス・ロラゲで、「Hommage à Aldo CICCOLINI　チッコリーニ氏を讃えて」と題したコンサートが開催され、舘野泉先生が出演しています。



FESTIVAL DEODAT DE SEVERAC
SAMEDI 18 JUILLET 2015 - 21h
SAINT FELIX LAURAGAIS
Chai du Domaine du RAVAN

Concert-Anniversaire de la naissance de Déodat de Séverac (20 juillet 1872)

Hommage à Aldo CICCOLINI

L'illustre pianiste Aldo Ciccolini vouait un attachement particulier à Déodat de Séverac et à sa musique. Il fut le premier à enregistrer l'intégrale de l'œuvre pour piano du compositeur pour EMI. Il a honoré de son talent unique le festival à trois reprises. Aldo Ciccolini nous a quittés le 1er février 2015 à 89 ans, il repose désormais dans le petit cimetière de St Félix Lauragais, non loin de la sépulture de Déodat de Séverac.

Izumi TATENO piano, François-Michel RIGNOL piano,
Marie CUBAYNES chant.
Mélodies et pièces pour piano de Déodat de Séverac
Oeuvres pour piano.

Prix des places : 13 € - 10 €

Location / Réservation
Maison Déodat de Severac 05 61 83 01 83
Office Tourisme St Félix Lauragais 05 62 18 96 99
festiseverac@orange.fr, www.festival-de-severac.fr

Amb la sosten : Conseil Régional Midi-Pyrénées, Conseil Général de la Haute-Garonne, Ville de Toulouse, Ville de St Félix Lauragais, ACB Banque Populaire.

NE PAS JETER SUR LA VOIE PUBLIQUE

「チッコリーニ氏を讃えて」演奏会チラシ

セヴラック通信　第 19 号 2015 後期　日本セヴラック協会 会報

2015 年 11 月 22 日発行
発　行：　日本セヴラック協会
http://www.geocities.jp/severacjp/index.html
E-Mail: severac.japon@gmail.com
名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール
顧問◎舘野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一
事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：　松田純子◎〒 247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL &FAX: 045-895-2317
連絡先：　亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp
印刷・製本：　フェデックス・キンコーズ・ジャパン

日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac -Japon